鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要
人文科学･社会科学編 第２号　2019

1886 年における「軍歌」の誕生
―明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論(16)―

大本　達也[1]

要旨

本論では、明治期における軍歌の形成過程を考察する。軍歌というジャンルは明治期において成立する。『小学唱歌集』(1881-4)や『新体詩抄・初編』(1882)、『新体詩歌』(1882-3)においてすでに軍歌的な作品が作られていたが、それらが軍歌と呼ばれることはなかった。1885 年末の「喇叭吹奏歌」の制定を機に、1886 年に河井源蔵編『軍歌』が刊行されることによって軍歌というジャンルが立ち上がる。新体詩と唱歌を合体させたこの書の編集が軍歌の基本形を作り出す。以後、軍歌は新体詩、唱歌などとも呼ばれつつも、独自のジャンルとして発展していく。

キーワード

新体詩，唱歌，「宮さん」，喇叭吹奏歌，外山正一

凡例

・本論中、敬称は省略する。
・大本による注釈は（　）で示し、引用は《　》で示す。
・出典は、ページが付されている紙・電子媒体の書籍や論文の場合［編著者名:ページ数］で示す。また、ページの付されていない電子媒体の書籍・論文の場合［編著者名:位置%］で示す。なお､｢国立国会図書館･デジタルコレクション｣からの引用は[編著者名:コマ数]、「国文学研究資料館」からの引用は[編著者名:画像ファイル名]とする。
・読みやすさに配慮し、旧字体漢字は新字体に変え、難読字にはひらがなルビを付す。なお、原典に元々付されているルビはカタカナで示す。
・「明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論」シリーズは、鈴鹿大学HPの他、筆者の開設するHP「大本達也の研究室」(http://www65.atwiki.jp/omototatsuya/)からもダウンロード可能である。正誤表も順次アップロードしているのでご参照いただければ幸いである。

はじめに

「詩歌論」たる各論４の第６稿目にあたるこの各論 4-6 では、明治中期までの時期にお

[1] 国際人間科学部国際学科非常勤講師

いて、唱歌や新体詩の中から軍歌が立ち上がっていく過程を追う(注)。

軍歌と言うと、パチンコ屋で鳴っている「軍艦マーチ」を連想する人もいるだろうし、右翼の街宣車が流す音楽を思い浮かべる人もいるだろう。「ここは御国を何百里」と口ずさめる人もまだ多いのではないだろうか。そんな軍歌・愛国歌のひとつに「海ゆかば」がある[小松 2017a]。

海行かば水漬(ミヅ)く屍(カバネ)　山行かば草生(ム)す屍　大君の辺(ヘ)にこそ死なめ　顧みはせじ

制作したＮＨＫによると、この歌は1937(昭12)年、《当時の大日本帝国政府が国民精神総動員強調週間を制定した際のテーマ曲》で《国民の戦闘意欲高揚を意図し》て、《放送協会(現NHK)の嘱託を受けて信時潔(1887-65)が作曲》した軍歌・愛国歌であり、「国民歌謡」で初めて放送されたという[NHK]。1942年、大政翼賛会により国家に準ずる「国民の歌」に指定されるが[辻田2014:61]、「NHKアーカイブス」で当時の動画を見ることができる[NHK]。なお、作曲した信時が所属していた東京音楽学校(現東京芸術大学音楽学部)は、初めて唱歌を世に送り出した文部省音楽取調掛が前身となっており(各論4-1参照)、このことからも軍歌と唱歌の関係性がうかがえよう。

さて、元朝日放送のアナウンサーで『疎開絵日記－学童疎開ドサ回り』(2003、文芸社)の著者でもある1933(昭8)年生まれの上田博章は、この曲の歌詞を《陸海軍の兵士は例え戦場に屍(シカバネ)を曝したとて、天皇の側(カタワラ)で、心を寄せて戦死するのである。決して 後悔はしないのだ》という《兵士の忠誠心や覚悟、戦意の昂揚を狙った歌》と解釈している[上田2016]。おそらく当時の帝国国民はこの歌をこのような解釈で受け取っていたのだ。

一方で上田は、自分にとってこの「海行かば」は《哀しい歌》であったとも証言している[同]。この曲は《太平洋戦争中は大本営発表の前に流され》ていたため[NHK]、《戦争の末期、サイパン島やテニアン島、アッツ島などが相次いで玉砕〈陥落〉したニュース》を聞いたことで、上田の脳裏で《この曲が負け戦(イクサ)、悲報、戦死、鎮魂歌などと結び付》いたのである[上田2016]。上田は、《ラヂオから「海行かば」が流れて来る》と、《あ、アメリカにやられてる。兵隊さんが大勢戦死した》ったと思うと同時に、《それが自分にもジワジワ近づいてくる薄気味悪さ恐ろしさが伝わって来》たと回想している[同]。

ところで、ここに出てくるサイパン島は、パリ講和会議を経て1920(大9)年から1945(昭20)年までの四半世紀、国際連盟の委託によって委任統治領とされた大日本帝国の植民地であった。多くの日本人が移住し、製糖業などで栄えたが、太平洋戦争の激戦地となり、日本軍約4万3000人、民間人約1万2000人、島民900人超、米軍約3500人の戦死者を出した[永田2018:9]。戦後60年にあたる2005(平17)年6月、平成天皇の強い希望で、初の海外慰霊訪問先としてこのサイパン島が選ばれた。米軍が上陸してきた時《砂に腹ばいに

なって死んだふりをしていた》と2人の元兵士が《身振り手振りで》説明するのを聞き、天皇は次の歌を詠む[同]。

サイパンに戦ひし人その様を　浜辺に伏して我らに語りき

天皇が立ち寄ったデイケアセンターで、その翌日にチャモロ人のマナムコ(老人）3人にインタビューした中島洋は、《中島さん、ぼくたち、きのう天皇陛下の前で「海行かば」を歌ったよ》と、《実に嬉しそう》に語ったことを報告している[中島2005:3]。帝国の解体より70年経ってなお、旧植民地の人々をして天皇のために喜んで死ぬ決意を歌わせしめる軍歌とはいったい何なのだろうか。

辻田真佐憲は、明治から第2次世界大戦の敗戦までに作られた軍歌は《1万曲を下らない》と推定している[辻田2014:84]。拙論で扱う明治期だけに限っても、ある調査では《作られた軍歌の数は2621曲》に及び、《調査漏れも考慮すれば、明治軍歌の総数はおよそ3000曲と考えてよい》という[同:7]。とりわけ、日清戦争中の2年間だけで《軍歌集は140冊以上、軍歌は1300曲以上も作られ》、辻田は主張するように日清戦争を通して軍歌は《上は天皇から下は民衆に至るまでが作る国民的なエンターテイメントに一挙に躍り出た》のである［同:21-2］。明治以降、第2次世界大戦終結に至るまでのおよそ半世紀、軍歌は今日におけるような《マニアックで狭小なジャンル》ではなく、《近代日本の音楽、いや映画、漫画、アニメなどあらゆるジャンルの娯楽産業と比較しても、これほどまで急速かつ広汎に普及したものは他になかった》のであり[同:22]、明治期に日本が「国民国家nation-state」として立ち上がって以来、敗戦によって失速するまで軍歌は「国民nation」にとっての最大級の娯楽として君臨する存在だったのである。

１．近世までの戦争歌

まず、古代の兵士や中世・近世の武士の担ったいくさ（「戦争」は「いくさ」の一種で国家間のものをさす)に関係する歌について考察してみよう。

先に言及した「海ゆかば」の歌詞は、『万葉集』巻18の4094番歌、大伴家持の「陸奥国に金を出だす詔書を賀く歌一首(賀陸奥国出金詔書歌)」がもととなっていて、原典は《海行者/美都久屍/山行者/草牟須屍/大皇乃/敞永許曽死米/可敞里見波勢自》となっている[小島1975:162]。他にも『万葉集』には、防人の歌など、軍事、忠君愛国にかかわる詩歌が多数ある。当時声に出して歌われたと推測される万葉詩歌には、最古のいくさ歌が含まれるのだ。

次に、琵琶にあわせて語られた平曲「平家物語」であるが、これは源平の合戦を中核とした語り物であり、やはりいくさ歌ととらえることができるだろう。

また、平安末期のはやり歌である今様にもいくさに関する歌は含まれている。たとえ

ば、『梁塵秘抄』におさめられた次の2首などである。

（248）関より東(ヒンガシ)の軍神(イクサガミ)　鹿島香取(カンドリ)諏訪の宮　又比良の明神　安房の洲滝(スタイ)の口や小鷹明神　熱田に八剣(ヤツルギ)　伊勢には多度の宮

（249）関より西なる軍神　一品中山(イッポンチュウサン)　安芸なる厳島　備中なる吉備津宮　播磨に広峰惣三所(ヒロミネソウサンジョ)　淡路の岩屋には住吉西の宮　［臼田1976:262-3］

ここには逢坂の関を境に東西に分けて武運長久を祈る神社が列挙されており、この《武士の興起する時代相を如実に反映》したいくさ歌である［同］。

さらに、室町期、足利将軍家によって庇護された能は、戦国・安土桃山期を経て発展し、江戸期、家光、家綱の時代に式楽となり、武士のたしなみとして欠かせないものとなる。武士、すなわち軍人により発展継承された能は、当然のことながらいくさとも深くかかわる芸能である。修羅道の苦悩やいくさの無常を扱った能を当時の武士がどのような心性で受け止めたのかなど論ずべきことは多々あるが、それらは別稿に譲り、ここでは2番目物における武将のいくさや5番目物の鬼退治など、いくさにまつわる能が多く存在し、それらの謡の一部がいくさ歌であることだけを確認しておく。

その例として世阿弥作『頼政』より、平家が宇治川を渡、平等院にこもる頼政に迫る場面を引く［観世1976:10-2］。

さる程に源平の兵(ツワモノ)。宇治川の南北乃(の)岸にうち臨み。鬨(トキ)の声矢叫びの音。波にたぐへて夥(オビタタ)し。橋の行桁(ユキゲタ)を隔てて戦ふ。…田原の又太郎忠綱と名のつて。宇治川乃(の)先陣我なりと。名のりもあへず三百余騎　鑣（くつわ）を揃へ川水(カワミズ)に。少しもためらはず。群れ居る群鳥(ムラトリ)の翼を並ぶる羽音もかくやと。白波にざつざつと。うち入れて。浮きぬ沈みぬ渡しけり…さばかりの大河なれども一騎も流れず此方之(コナタの)岸に。喚(ヲメ)いて上がれば味方の勢は。我ながら踏みもためず。半町ばかり。覚えず退って。切先を揃えて。此処を最後と戦うたり。

世にいくさの尽きぬ以上、そこにはそれにまつわるいくさ歌があった。ただ、これらはいずれも軍歌とは呼ばれることはなかった。軍歌という用語の最も古い用例は、成立が室町期にまでさかのぼり得る『義経百首軍歌』であるかもしれないと辻田は指摘している［辻田2014:7］。この書は、近世に流行した道歌、すなわち道徳的な教えや徳目をわかりやすく歌った詩歌で構成されている。その道家の１種である兵法などを詠んだ歌集が、名将の名を借用して、『信玄軍歌抄』、『謙信百首軍歌』、『持長軍歌百首』、『山本勘介軍歌集』などという偽書として編まれたのである［同］。たとえば、『義経百首軍歌』の内容は、以下のようにいくさに関する教訓を集めたものである（スペースは大本）。

出陣ハ　立願タテヤ　祈祷シテ　所願成就ノ　上ニ出ベシ

［並河1848：200014284_00005.jpg］

幾度(たび)モ　敵ノ陣屋ヘ　馬ヤ鷹　肴ヲ送リ　調略(=計略)ヲセヨ

［同:200014284_00007.jpg］

何時モ　大将軍ハ　後ソト　敵ノ見テル　ヤフ(よう)ニソナ(備)ヘ(え)ヨ

［同：200014284_00018.jpg］

以上のように、近世まででも和歌や宣命、平曲、謡曲、道歌などの中にいくさ歌が含まれている。さらに「軍歌」と銘打たれた書物も存在する。けれども、現在のような軍歌あるいはその直接の始祖にあたるようないくさ歌は見当たらない。我々の知る軍歌は明治以降に発生したものに他ならない。そして、明治から昭和にかけての時代ほど、多くのいくさ歌が生み出された時代はなかったのである。

２．明治初期における戦争歌

それでは、明治期における軍歌の形成過程を考察していきたい。本稿では軍歌の成立を1886(明19）年に置くが、まずそれまでのいくさ（戦争）歌をめぐる状況を年代順に追っていこう。

2.1「宮さん」

本邦初の軍歌として維新の頃に流行した「宮さん」(「宮さん宮さん」、「トコトンヤレ節」)がよくあげられる[西野1932:28]。

宮さん宮さん御馬の前に　ひらひらするのは何んぢゃいな　トコトンヤレトンヤレナ
ありや朝敵征伐せよとの　錦の御旗じや知らないか　トコトンヤレトンヤレナ

作曲は大村益次郎(村田蔵六、1824-69)とされるが真偽のほどは定かではない。楽譜には1891年発刊の『手風琴曲譜集・第2集』があるが[三谷1891:6]、維新前後の旋律は異なっていたらしい。

この曲の歌詞は、1868年の鳥羽伏見の戦いに始まる戊辰戦争時、王政復古により総裁(天皇弱年により置かれた明治新政府の官職、明治元年、太政官制の復活により廃止)に任命された有栖川宮熾仁(たるひと)親王(1835-95)が錦の御旗を先立てて進軍する様子を歌ったものである。作詞は長州藩萩出身の尊王攘夷家・品川弥二郎(1843-1900)で、ここで歌われている錦の御旗の作成を親王に自ら進言したという[田口1879:127]。

品川は

> 庶民一人々々に官軍の意味を説明しているより、歌謡を紙に刷り、官軍の進み行く沿道でまき散らしながらゆくことが良いのではないか

と考えてこの戦争歌を作ったと伝えられる[同]。官軍はこの「宮さん宮さん」を歌いつつ、《江戸にむけて進撃していった》と言うのである[同]。本邦初の軍歌とするにふさわしい逸話ではあるが、にわかには信じがたい話でもある。

それでも、この歌の制作過程については次のような補強証言がある。

> 或る日のこと品川がこの店(書店)に来て、主人にトコトンヤレ節の原稿を示し、明日迄に何百部かを印刷することを依頼した。主人は何人かの職人に外出を禁じて二階に罐詰にし、徹夜して版木を彫刻し又刷り、約束通りの時間までにそれを作りあげた。品川はそれを京都市内の町の辻で読売りに売らせたため、間もなくトコトソヤレ節が一般に流行する様になった。　〈奥谷松治(1940)『品川弥二郎伝』荘阻術院〉[同]

では、「宮さん」をもって軍歌の誕生とすべきなのだろうか。答えは否である。

その理由を述べよう。まず、明治中期の1892(明25)年発刊の『手風琴独稽古・第1編』を見てみると、収録曲は《唱歌の部》《清楽の部》《軍歌の部》《雑曲の部》の4部門に分けられており、この「宮さん」はなんと《雑曲の部》に分類されている[林1892:2-3]。成立から四半世紀を経た当時、「宮さん」は軍歌とは認識されていなかったのだ。このことから、明治中期までのいずれかの時期において「宮さん」とは別の場所から軍歌というジャンルが生まれたことがわかるだろう。

次に、その歌詞が軍歌特有の勇壮さや荘厳さを欠いた俗謡の流れの中にあることである。品川が《松陰の門に通ふていゐる所から和歌や狂歌や俗曲》が得意であったという証言からもそれはうなずけよう[西野1932:28]。

そして最後に、後述するように軍歌は、国民のために作られたものでなければならないことだ。確かに「宮さん」には、結果とし国民政府を形成していく官軍側へと人々を統合しようという意図が込められている。その意味で、この歌を軍歌のさきがけとして位置付けることは可能だろう。ただ、国民国家として統合されんとする時期に、肝心の国民はいまだ登場していない。それゆえ、この作品をもって軍歌の誕生とするのはどうしても無理なのである。

ちなみに、この曲はジャポニズムの潮流に乗り、1885(明18)年にロンドンで初演され欧州で大流行したサリバン作曲のオペレッタ・ミカドの中でも使われ、さらに後年、プッチーニのオペラ・蝶々夫人にも取り入れられている。

2.2 『小学唱歌集』

1881(明14)年から1884(明17)年にかけて、文部省音楽取調掛の伊沢修二(1851-1927)による編集で発行された3編の『小学唱歌集』に忠君愛国的、戦意発揚的な唱歌が多く含まれていることは各論4-1で詳述したが、以下いくつかの作品を確認しておこう。

まず、『小学唱歌集・初編』に掲載されている「君が代」だ。国歌とされている現行歌より長く2番まである[文部省1884a:23]。

一　君が代は。ちよ(千代)にやちよ(八千代)に。さざれいし(石)の。巌となりて。こけ(苔)のむすまでうご(動)きなく。常磐(トキハ)かきは(堅磐)に。かぎ(限)りもあらじ。
二　きみがよは。千尋の底の。さざれいしの鵜(ウ)のゐる磯と。あらはるるまで。かぎりなき。みよの栄を。ほぎたてまつる。

先に触れた1892(明25)年刊行の『手風琴独稽古・第1編』では、《唱歌の部》に分類されており [林1892:2-3]、明治中期においても唱歌として流通していたことがわかる。

次に、「蛍の光」の原型である「蛍」だが、この唱歌には

千島のおく(奥)も。おきなわ(沖縄)も。やしま(八洲)のうちの。まも(守)りなり

という戦後カットされた歌詞がある[文部省1884a:20]。この歌は本来《学校を巣立ち、戦に赴く兵士を送る歌》なのである[各論4-1:38]。

そして、1884(明17)年発行の『小学唱歌集・第2編』採録の「皇御国(スメラミクニ)」は、後述するように陸海軍の「喇叭吹奏歌」に選ばれることになる。

［文部省1884b:15］。

一　すめらみくに(皇御国)の。もののふ(武士)は。いかなる事をか。つとむべき。ただ身にもてる。まごころを。君と親とに。つ(尽)つくすまで。
二　皇御国の。おのこ(男子)らは。たわまずお(折)れぬ。こころ(心)もて。世のなりはひ(業)を。つとめなし。くに(国)と民とを。と(富)とますべし

さらに軍歌的な唱歌は、1884(明17)年発行の『小学唱歌集・第３編』採録の「招魂祭」である[文部省1884c:50]。

一　ここに奠(マツ)る。君が霊(ミタマ)。蘭はくだけて。香(カ)に匂ひ。骨は朽ちて。名をぞ残す。机(ツクエ)代物(シロモノ)。うけよ君。

二　此所(ココ)にまつ(祀)る。戦死の人。骨を砕くも。君が為。国のまも(守)り。世々の鑑(カガミ)。光りた(絶)えせじ。そのひかり。

1872(明3)年、東京招魂社（現靖国神社）において戊辰戦争で亡くなった兵士のための招魂祭が行われる。この歌は《明治政府樹立に尽くした死者への鎮魂歌》である[各論4-1:39]。

また、同年発行の『小学唱歌集・第３編』収録の「古戦場」もこの「招魂祭」と似た主題を描いている[文部省1884c:18]。

一　屍(カバネ)は朽(クチ)て。骨となり。刃はを(折)れて。しも(霜)むす(結)ぶ。今はた靡(ナビ)く。旗薄(ススキ)。　皷(つづみ)のおと(音)か。まつ(松)風か。
二　人影み(見)えず。風さむ(寒)し。蓬(ヨモギ)はか(枯)れて。霜しろ(白)し。命を捨し。真荒雄(マスラヲ)が。その名は千代も。朽せじな。

ちなみに、冒頭で言及した「軍艦マーチ」は、もともと鳥山啓(ひらく)(1837-1914)作詞の「軍艦」という唱歌で、1893(明26)年発行の伊沢編『小学唱歌集・巻之6』に掲載されている。

守るも攻むるもくろがね(鉄)の　浮かべる城ぞたの(頼)みなる
う(浮)かべる此〈是〉城日の本の　皇国(ミクニ)の四方(ヨモ)を守るべし
真金のその船日の本に仇なすくに(国)を攻めよかし　[鳥山]

1900(明33)年に編曲され「軍艦行進曲」として発表されたものが海軍の制式行進曲に選ばれ、それが現在も陸上・海上自衛隊に引き継がれている[辻井:824/2875]。このように、軍歌中の軍歌と言えるこの曲が、発表当時は小学生向けの唱歌として発表されたことは、当時、軍歌と唱歌が不可分の存在であったことを示す好例であろう。

最後に、軍歌成立における小学唱歌の役割についてまとめておこう。1873(明5)年の学制を経て1879(明11)年の教育令の発布により全国に小学校が設置されてゆき、国民は「唱歌(音楽)」という科目を通して歌を歌うことのみならず、同じ歌を国民として共有することになる。そして、それらの歌を通し、愛国心や尊王、国防精神を学ぶ。いや、学ぶといくより血肉化してゆく。文部省唱歌は軍歌の揺籃として機能したのであり、唱歌教育がなければ軍歌というジャンルも成立し得なかったのである。

2.3『新体詩抄・初編』

1882(明15)年発刊の『新体詩抄・初編』収録の新体詩を各論4-2において「風物詩」「戦争詩」「論説詩」「教訓詩」「人生詩」に分類したところ、最多項目は戦争詩であっ

た。

では、これらの戦争詩のうち外山正一作の「抜刀隊」（14行×6連、84行詩）を抜粋して再度見てみたい[外山1882:19-21]。

我は官軍我敵は　天地容(い)れざる朝敵ぞ
…
敵の亡ぶる夫迄(それまで)は　進めや進め諸共に
玉ちる剣抜き連れて　死ぬる覚悟で進むべし
…
死地に入るのも君が為
敵の亡ぶる夫迄は　進めや進め諸共に
玉ちる剣抜き連れて　死ぬる覚悟で進むべし

この新体詩は、外山自身が述べているように西南戦争をもとにしたもので、フランスの国歌・ラ・マルセイエーズやドイツの愛国的戦争歌のラインの守りの《例に倣ひ》作られたものである[同:19]。1885(明18)年、陸軍軍楽隊を指導するフランス人のルルーにより曲が付けられ、その《指揮と軍楽隊の演奏により鹿鳴館で発表され、好評を博した》という[尼ヶ崎2011:157-8]。

「宮さん」と比較しても「抜刀隊」の歌詞は軍歌と呼ぶにふさわしいものである。というより、この新体詩が軍歌調の典型を作り出したのである。ただ、ジャンルとしての軍歌が生み出されるには1886(明19)年における『軍歌』の発刊を待たねばならないが、その件は後述する。

2.4『新体詩歌』

『新体詩歌』全５巻は、『新体詩抄・初編』をほぼまるごと取り込んで1882-3(明15-6)年に編集発行された詩歌集であり、ここにも戦争にまつわる歌が多く含まれている。各論4-3において新たに収録された作品を『新体詩抄・初編』同様5つに分類したが、やはり戦争詩が最多の項目となっている。

新たに収録されたのは、「楠正成桜井駅に於て遺訓の歌」「花月の歌」「刺客を詠ずる詩」「詠和気公清麻呂歌」「小楠公を詠ずるの歌」「詠史」「西南の役より凱陣せし人を祝するの歌」「熊谷直実暁に敦盛を追ふの歌」「月照僧の入水をいたみて読める歌」「舞曲に擬して作る」「俊基朝臣東下」「吊忠魂歌」「佐久間象山の謫居の歌」などである。

詳細は各論4-3に譲るが、タイトルから推測できるように既存の長歌の再録がほとんどだ。『新体詩歌』では『新体詩抄』と異なり、武士や維新の志士の詠んだ長歌を「新体詩(歌)」として採用し、それが編集上の特色となっている。西洋詩の翻訳および新作新体詩

に長歌という組み合わせが当時の読者に支持され、この詩歌集の発刊を機に新体詩が広く知られるようになっていくのである。明治期における軍歌に長歌調が数多く存在するのもこの『新体詩歌』が生み出した伝統である。

３．軍歌元年としての1886年

1886(明19)年頃から《軍歌・軍歌集の楽譜》が出版されるようになり、この年だけでもその数は《およそ50 冊にも及んだ》と満下順子は強調する[満下2004:81]。また、軍歌が《徐々に五線譜で出版されるようになる》のは1889(明22)年頃からであるが[同]、それまでの３年間に出版された「軍歌集」には《明治期の歌詞のみの軍歌の約７割が収録されて》いると長谷川由美子は指摘している[長谷川2009:19]。このように、1886年は「軍歌」という用語が広く知れ渡り始めた年であり、長谷川は1886(明19)年からの3年間を《後の軍歌における歌詞の雛形を示した時期》としている[同:19]。

その軍歌の歌詞の《雛型》を初提示したのはこの河井源蔵編集の『軍歌』である。河井は、国学者による唱歌調の「喇叭吹奏歌」に既存の新体詩やを組み込んで『軍歌』を編集することで「軍歌」の基本形を提示したのである。それゆえ、本稿では河井版『軍歌』が刊行されたこの年を軍歌元年に位置付ける。以下、その内容を見ていこう。

3.1河井版『軍歌』

1886年4月、有則軒から河井源蔵編『軍歌』が発刊される。山本康治が指摘するように、この書を皮切りに『軍歌』と題する異本は《翌5月には7点、6月には4点、と19年末までに50点余出版》される［山本2012:85]。さらに、その後もこの《河井版の内容を模倣した出版》が続き、そういった「軍歌集」の出版点数は85点にものぼり、そのうち《61 点が河井版と同じ作品を収めている》という[同]。そのため、《この後の「軍歌集」に再録される歌詞のみの軍歌の約７割の初出はこの時期に出揃う》のである[同]。

収録作は22篇 で、そのうちの6篇が『新体詩抄』あるいは『新体詩歌』からの転載さである。『新体詩抄』からは、外山の新作新体詩「抜刀隊の歌(原題は「抜刀隊」)」、翻訳詩「カムプベル氏英国海軍の歌」、「テニソン氏軽騎兵隊(原題は「軽騎隊」)進撃の歌」の3篇がとられ、『新体詩歌』からは「楠正成桜井駅に於て正行へ遺訓の歌」「小楠公を詠ずるの歌」「詠史」の長歌体新体詩3篇がとられている。

では、以下残りの16篇を見てみよう。

3.2喇叭(らっぱ)吹奏歌

冒頭の9編は「喇叭吹奏歌」と題されている。《詳しい経緯は分かっていない》ものの前年末に「陸海軍喇叭吹奏歌」が正式に制定され[山本2012:85]、それがきっかけで『軍歌』と題された本が多数発刊されることになったのである。

河井版『軍歌』が生まれるきっかけとなったこの「喇叭吹奏歌」は、国定軍歌としての性質も兼ね備えており、軍歌成立史において重要な意味を有するものであるため、以下、歌詞全文を紹介する[河井1886:2-5]。

1つ目は「君が代」で、《天皇及皇太后皇后皇太子太子妃皇族》に対して《敬礼》を表すときに用いる旨の解説が付されている。歌詞は『小学唱歌集・初編』掲載のものより短縮されており、現行の国歌と同じである。

2つ目はかの「海ゆかば」だ。先に触れたNHK制作の「海行かば」とほぼ同じ歌詞、最後の句が「のと(長閑)にはし(死)なし」と異なっている。『続日本紀』に『万葉集』と類似の宣命があり、こちらは最後の句が《能矜尓波不死》である［宮岡1993:2]。この古歌には２つのバージョンがあったわけだ。当時、雅楽の東季芳(1838-1904)がNHK版とは別の曲をつけており、これは後述する《「軍艦行進曲」の中間部（トリオ）の主旋律》として転用されている[小松2017b]。

3つ目の「皇御国」は先に見たものと同じで,『小学唱歌集・第２編』からそのままとられている。

4つ目は「国の鎮め」で、

国の鎮めのみやしろ(御社)と　いつきまつろふ神霊
けふ(今日)の祭りの賑ひを　天かけりてもみそなわせ
治まる御代を守りませ

と招魂祭を歌う。

5つ目の「命を捨てて」は、

命を捨てて大丈夫が　たてし功績は天地の
存へき限り語つき　いひつ(言継)きゆ(行)かむ後の世に
絶せず尽きじ万世も

と忠君が歌われる。

6つ目の「扶桑歌」では、

わが天皇の治めしる　わか日本は万世も
やほ万世も動かぬそ　神の御世より神ながら
治め玉へはとことは(常)に　動かぬ御代と変らぬそ
四方に輝く御稜威は　月日の如く照すなり
斯かるめてたき我国そ　やよ国民よ朝夕に

天皇(キミ)が恵に報いんと　心を合せひたぶるに
尽せよや人力(ヒトチカラ)をも　合せて尽せ人々よ

と天皇の威光と忠君を説く。

7つ目の「あらきいはね」は、

あらきいわね(磐根)をふみさくみ　険しき坂を越えゆ(行)くも
武士(モノノフ)の身の常(ぞ)かし　習(ナラ)せや慣(ナレ)る君(が)かため(為)
いむ(射向)かふ敵はむけおへつ　帰りて早く我君(ワガキミ)の
御心休めまへ(参)らせむ　急(げ)けや急(げ)け御軍(ミイクサ)よ

と聖戦を歌う。

8つ目は「おほ(大)君の」では、

おほ君の　御稜威(ミイツ)かしこしみいくさ(御軍)の
いさを(功績)尊としまつろわぬ　国をことむけちはやふる(千早振)
ひと(人)とやはしてたひらけく　かへるおもへは大君(オホキミ)の
みいつ(大威光)かしこし御軍(ミイクサ)の　功績(イサヲ)貴としその(其)みいつ(大威光)はや
そのいさを(功績)はや

と、戦績を奨励する。

9つ目は「ふきなす笛」である。歌詞は

ふきなす笛のその音も　捧ぐる旗のその色も
ものの哀(あはれ)を知り顔に　けふ(今日)はものこそ哀しけれ
千百万の敵軍もと(取)りて来ぬへ(べ)き男(ます)らおと
おもへる我等が袖まて(で)も　涙の雨にぬ(濡)れにけり

となっている。

以上の「喇叭吹奏歌」のほとんどが文部省唱歌と同じ国学者の手になるもので、そのまま唱歌とも呼べる作風である。

3.3外山正一「軍歌」

河井版『軍歌』では「喇叭吹奏歌」以外の作品については、《吹奏歌に非ずといへとも　また鼓勇の一助にもと今ここに合わせしるしぬ》と説明された上で掲載されている[河井188

6:5]。

収録作のひとつに「軍歌」と題された作品がある。作者は外山、後に伊沢により曲が付される。全9連のうち、第1連、第3連をひく[同:5-7]。

第一　来れや来れやいさ来たれ　御国を守れや諸共に
　　寄せ来る敵は多くとも　恐るる勿(ナカ)れ恐るるな
　　死すとも退く事勿れ　御国の為なり君の為
第三　勇めや勇めや皆勇め　剣も弾丸も何のその
　　御国を守る兵士(ツハモノ)の　身は鉄よりもなお堅し
　　死すとも退く事勿れ　御国の為なり君の為

この新体詩、唱歌それぞれの生みの親の合作は、軍歌「皇国の守り」あるいは「来たれや来たれ」として歌い継がれてゆく。なお、「軍歌」が作品名として通用するということは、軍歌という用語がジャンル名として成立していなかったことの証左でもある。

3.4その他

最後に、残りの収録作6つを見る。

１つ目の「行軍歌」は12行、

我が日本(ヒノモト)の国体(クニガラ)は　故(フル)き神代の頃よりも
神の御国と称(タタ)へきて

と国体の神聖から歌い始め、

寇(アダ)なす蝦夷有(エミシアリ)もせは(ば)　躊躇(タメラ)ふ事はなきものを
射ち夷(タヒラ)けれ大君(オホギミ)の　御心慰(ミココロヤス)め奉れ人

と敵の成敗で歌いおさめる[河井1886:10-1]

２つ目の「進軍歌」も同じ12行で、《弾丸は霰(アラレ)と空に飛び　剣は野辺の電(イナヅマ)か…桜と匂ふ九段坂　空に聳(ソビ)える靖国の》という調子である[同:11]。

３つ目の「軍旗の歌」は『軍歌集註釈』(1889)では陸軍の立見尚文(1845-1907)作とされている[奥田1889:8]。5連から成り、その冒頭は《二千五百年以来　光り輝く日本国/その国守る軍人よ　何時の仰ぐ大旗は/我大君の御標(ミシルシ)なるぞ》となっている[河井1886:11-3]。

４つ目の「扶桑歌」は「喇叭吹奏歌」のものとは異なり、《天皇尊(スメラミコト)の統御(オサメ)しる　我日本(ヒノモト)

は千五百代も/一代の如く神なから　治め給へは大御稜威》と始まる7行歌である[同:13-4]。先の『軍歌集註釈』によると国学者の福羽美静(1837-1907)作とされ、《扶桑とは日本の一名(別称)なり》と解説されている[奥田1889:18]。

５つ目の「復古の歌」も国学者の物集高見(1847-1928)作で、《王政復古のそのかみを思へば凄し慶応の》と鳥羽伏見の戦いを歌う20行歌である[河井1886:14-5]。

６つ目の「日本魂」は『新体詩抄・初編』の編者の一人、矢田部良吉(1851-99)で、連には分けられていないが

日本魂は何そ　寄せ来る敵を打払へ
外国人の侮を　夢にも受ることは無し
是ぞ日本の心なる　是ぞ日本の心なる

といった3行を同じリフレインで10回繰り返す30行歌である［同:22-4］。

４．軍歌と新体詩そして唱歌

1886(明19)年には河井版『軍歌』以外にも軍歌成立上重要な書が刊行されている。この年は新体詩、唱歌が混ざり合う中から軍歌というジャンルがまさに立ち上がる年なのであるが、以下、刊行順に見ていきたい。

4.1『新体詩歌集』

6月、宇都宮源平編『新体詩歌集』が出される。先ほど触れた『軍歌』の「軍歌」は「御国を守れ」と改題されて採録されている[宇都宮1886:32]。掲載された新体詩歌のほとんどは先に触れた『新体詩歌』全5集からとられたものであるが、戦争歌、とりわけ長歌の採用が多く、『新体詩歌集』と銘打ちながらも、この書は「軍歌集」と呼んでよい内容になっている。

4.2『書生唱歌』

7月刊行の『書生唱歌』は８つの唱歌から構成されている。うち5編が軍歌的な唱歌である。序には《男子に女らしき柔弱無気力の風ある時》は《知らず知らず勇進活発の本性に復》すことを目的として編集したとある[岸田1886:3-4]。

1つ目は鷺城生作29行唱歌「兵士の歌」である。『軍歌集註釈』によると元長州藩士・大庭景陽(?-1915)の作である[奥田1889:15]。

九段の丘のまんなかに
そびえ立たるおほやしろ、

勇士の霊(タマ)こそ宿るなれ

と靖国神社を歌い、

開化に進む日本国。
国を守りの神殿に
しづまる御霊(ミタマ)を身にてらし
進めやすすめつはものら

として、《敵は異国の毛唐人》と続け、

千万勢がよせるとも、
ひけずたゆまずうち向井ひ、
剣の霰(アラレ)玉のあめ
厭はず敵をうち殺し、
日本武士のてがら見せ、
日本武士の名をあげよ

と結ぶ[岸田1886:6-7]。

2つ目も同じ鷺城生作の19行の「大和魂」で、

敷島の、やまとの国の大丈夫(マスラヲ)よ、
勇気張りたてしりぞくな

とはじめられ、

ますら武夫(タケヲ)が戦場で
降りくる矢玉の中にたち
血ぬりし刃をうちふりて
敵おひ掃ふ如くせよ

と、敵から退却せぬことを大和魂として結ばれる[同:5-7]。

3つ目は国府寺新作の11、2行唱歌3章で構成される「剣舞の歌」である。第1章は

立つて舞ふなら剣を持つて舞へや。

剣は男児の大事な道具。

と始められ、喧嘩を売られたときには

あつぱれ名誉を楯にとり、
剣を引き抜き勝負しろ。

と結ばれる[同:8-9]。第2章は

立つて躍るなら剣を抜いて躍れ。
剣は男児の大事な道具。…
国と国とのあらそひに
両軍間近く逼り合ひ
硝煙弾雨(ダンウ)のこりなく

とし、そんな白兵戦で役立つのは

平生なれたる腰間(羊かん)の
秋水(=剣)ならで何かある。

とする。そして第3章を

剣をながめてつらつらと
おもひまはせばそも扨(サテ)も、
これは大事な道具なり。…
されど道理のない時に
抜てさわぐは馬鹿の所作…
剣舞の一曲舞ふたらば、
事に実のある時をまて

としてしめくくる。

4つめも同じ国府寺の「ラインの守(マモリ)〈独乙(どいつ)書生の歌〉」である[同:10-7]。先に言及した「ラインの守り」の翻訳詩歌であるが、これを《独乙(どいつ)書生の歌》の呼んでいるところからも書生唱歌と軍歌の近さがうかがえる。

5つ目は桜陰散人作の「勉強の歌」である。内容は

一朝国に事ありて。
炮火のほのほ(炎)は点をや(焼)き
喇叭(ラッパ)の声は地にひび(響)き
修羅のちまたとなる時は…
肩に鉄砲、腰に瞼、
近衛連隊もろともに、
進めの声をき(聞)くや否、
一歩もひるまずまじろわず、
国家の大事を先にして、…
日本男児の肝をみ(見)せ、
おく(遅)れをとらね心がけ…
国家の大事にあたるべく
民のたの(頼)みに応ずべく
あつぱれ勉強しよじやないか

というもので、不退転の大和魂と勧学の歌となっている[同:21-23]。

当時の書生におけるいわゆる「バンカラ」気風は明治政府の富国強兵政策と密接な関係があり(各論4-5参照)、この書生唱歌が軍歌集的な仕上がりとなっているのはその反映と考えられる。

4.3『新体詞選』

8月刊行の『新体詞選』の編者は美妙・山田武太郎(1868-1910)である。山田は同年10月に本邦初の個人新体詩歌集『新体詩華・少年姿』を発刊するなど新体詩の発展に大きく寄与する(各論4-5参照)。

この新体詩集の中に樵耕(しょうこう)の号で書かれた山田の「戦景大和魂」が収録されている。これを短縮し「敵は幾万」と改題されたものが、1891(明24)年刊の『国民唱歌集・第１』に楽譜とともに掲載される[小山1891:20-2]。作曲は東京音楽学校の小山作之助(1864-1927)で、当時同校校長であった恩師の伊沢が「序」を寄せている。ここでは、全8節のうち「敵は幾万」に採られている3節を引く[山田1886:13-7]。

敵は幾万ありとても、すべて烏合の勢なるぞ。
烏合の勢にあらずとも、味方に正しき道理あり。
邪はそれ正に勝難く、直は曲にぞ勝栗(カチグリ)の
堅き心の一徹は、石に箭(ヤ)(=矢)の立つ例(タメシ)あり。

石に立つ箭の例あり。などて怖るる事やある。
などてたゆたふ事やある。

風にひらめく連隊旗　記紋(シルシ)は登る旭(アサヒコ)よ。
旗は飛来(トビク)る弾丸に、やぶるる程こそ誉(ホマレ)なれ。
身は日本(ヒノモト)の兵士(ツハモノ)よ。旗にな恥じぞ進めよや。
倒るるまでも進めよや。裂かるるまでも進めよや。
旗にな恥じぞ。恥なせぞ。などて怖るる事やある。
などてたゆたふ事やある。

破れて逃ぐるは国の恥。進みて死ぬるは身の誉、
瓦となりて残るより、玉となりつつ砕けよや。
畳の上にて死ぬことは、武士の為すべき道ならず。
躯(ムクロ)を馬蹄にかけられつ、身を野晒(ノザラシ)になしてこそ、
世に武士(モノノフ)の義と言わめ。などて怖るる事やある。
などてたゆたふ事やある。

この「敵は幾万」は《太平洋戦争中に戦勝報道のBGMとして使われた》こともあり[辻田2014:15]、広く知られる軍歌となる。

4.4『新撰軍歌抄』

前述の大庭景陽が編集し12月に刊行された軍歌集は、河井版『軍歌』の焼き直しではあるものの「喇叭吹奏歌」9曲は附録とされ[大庭1886:35-7]、西南戦争を歌った「熊本籠城の歌」他[同:19-21]、大場の新作が5篇掲載されている。他の4篇を見てみよう。

まず、4節構成の「凱戦の歌」の第1節である[同:11]。

柳桜をこき交ぜし　都の春の朝風に
吹き翻へる日章旗　今日凱旋の我軍を
欣(ヨロコ)び迎ふ国民の　見渡すはるか彼方に
歩兵騎兵の粛々(シユクシユク)と　喇叭(ラツパ)の声の勇ましし

次に、3節構成の「兵士の歌」の第1節である[同:16]。

皇国(ミクニ)の為と君の為　力を尽すは人の義務
我国むかし忠臣と　仰き尊(あおぎトフ)とむ楠公は

皇ら帝の御為に　湊河原の朝露と
ともに屍ねは消れども　香しき名は今もなを
我大君の大御稜威と　我日の本の国光と
共に世界に輝けり　共に世界に輝けり

そして、4節構成の「日本刀の歌」だが、その第2節は

百戦錬磨の功を経て　きたい出せる丈夫の
忠魂義膽(肝)は鉄壁の　城より堅き頼母しさ
動かぬ君か大御代と　世界に類ひなかりけり

となっている[同:23-4]。

最後に、20行詩「桜の歌」で、本居宣長の和歌を下敷きに

我国守る武士の　大和心を人問はば
朝日に匂ふ山桜…
桜は忠義の花なるぞ…
千春万春動かざる
皇帝の大御代と　共に世界に例しなき
桜花こそ愛たけれ

と歌う[同:28-9]。この歌は後に「桜花」として知られるようになる。

なお、長谷川は「軍歌」の定義についての初出はこの『新撰軍歌抄』における大庭の「例言」であるとするが[長谷川2009:18]、そこでは軍歌が次のように解説されている(句読点大本)。

軍歌は欧州各国の軍隊に用古物にして、その章句音調などに至るり手は各国小委ありと雖、之ヲ要スルニ行軍中欠ク可ラサルモノトス。蓋シ(確かに)行軍途上之ヲ諷唱スレバ、啻ニ(単に)身体ノ疲労ヲスルノミナラズ、兵士ヲシテ其志気ヲ震起セシメ、其精神ヲ勇壮ナラシムルノ利益アレバナリ。

欧州における軍歌の意味および意義を明確につかんでいた大庭は、今日と同じ意味での軍歌として自らの作品を世に送り出したわけだ。その意味で、この軍歌集は軍歌元年を締めくくる重要な書なのである。

５．新体詩、唱歌そして軍歌

以上見てきたように、軍歌は新体詩、唱歌の中から立ち上がってゆく。外山も1895(明28)年の『新体詩歌集』で《新体詩及び其の一族なる軍歌》という言い方をしているが[外山1895:4]、尼ヶ崎彬はこの状況について《はじめから軍歌は新体詩の一部であった》と断言している[尼ヶ崎2011:158]。本稿ではそこに唱歌を加え、軍歌は新体詩と唱歌の交差点で生み出されたことを強調する。では、1886(明19)年以後における唱歌と軍歌の混交状況を見てみよう。

まず、1888(明21)年の『唱歌』には「軍歌」という項目が設けられている[吉村1888:11]。次に、1889(明22)年刊行の高島文吉編『軍歌集』には「立皇太子祝の唱歌」が組み入れられる[高島1889:4-5]。《吾等がうやまひ奉る　我等が尊(タツト)みたてまつる/明宮嘉仁(ハルノミヤヨシヒト)親王(後の大正天皇)は》。そして、1890(明23)年の『生徒用唱歌』では「抜刀隊」や「御国の守(御国を守れ)」、「楠正成(桜井駅に於て)遺訓の歌」、「来れや来れ」などの軍歌が採用される[中村1890:16-8]。

さらに、先に触れた「敵は幾万(戦景大和魂)」掲載の1891(明24)年の『国民唱歌集・第１』は半分の曲は軍歌としても問題ないもので、軍歌集と呼んでもおかしくない内容である。9編、歌のさわりだけを見てみる。

第1に「轟く筒音」[小山1891:7-8]、

とどろ(轟)くつつおと(筒音)　みなぎる煙
すす(進)めすす(進)め　いざと(疾)くすす(進)め　おもしろや。

第2に「勝利」[同:9-10]、

いは(祝)へいは(祝)へ、共にいは(祝)へ、うた(歌)へやうた(歌)へや、共にうた(歌)へ、勝利勝利の声高く。

第3に「大和魂」[同:11-12]、

やまとたましひ(大和魂)みが(磨)きてぞ
国の光となりなまし。

第4に「青海原」[同:14-5]、

嵐を凌ぎ波を越え、皇御戦(スメラミイクサ)の船競(フナキホヒ)、
海(ワタ)の外まで功績(イサヲシ)を

高く立てなむ日の御旗(ミハタ)。

第5に「海軍」[同:18-9]、

よるひる(夜昼)わかずまも(守)れやまも(守)れ、ちひろ(千尋)の海も陸のごと、山なす波もものとせず、八州(ヤシマ)のめぐりをかたむる御軍(ミイクサ)。よるひるわかず、まもれやまもれ。

第6に「朝日の御旗」[同:19-20]、

日の本としも名にしおへば
朝日の御旗ささ(奉)げも(持)ちて
いたらむくに(国)をなびけてまし
あらゆるくにぐに(国々)平(ことむ)けまし。

第７に「大和島根」[同:22-3]、

大和島根(ヤマトシマネ)は、神代より、
神のまも(守)らすくになれば、
常磐(トキハ)かきは(堅磐)にきみ(君)が代の、
うご(動く)くためしもなかりけり。

第8に「皇国の光」[同:23-4]、

世界を照さむ、光の色、
まずこそ匂へし、東の海
八十島(ヤホシマ)千島の、波間をわけの、
今さしのぼ(昇)るやあさひかげ(朝日影)。

第９に「稲村が崎」[同:25-6]、

鎌倉山の極楽寺、要塞を堅固に、構えたり。
稲村が崎うち渡し、是よりいざや、攻め入らむ。

唱歌教育、すなわち科目としての音楽教育がなければ軍歌の隆盛はなかった。明治中期

において軍歌は音楽教育の普及に乗って広がり、また唱歌は軍歌の流行によって広く国民のものとして発展してゆく。

波多江秀次は1889(明22)年刊の『音楽新論・唱歌原理』の第7章「音楽と教育との関係」で、《音楽の改良普及及実施は国家の最大緊要務と云はざるを得ざるなり》と主張し[波多江1889:52]、《音楽は教育上に於て徳育と最も親密なる関係を有せり》として、音楽教育の効用をこう説く[同:33-4]。

> 人をして勇壮活発の気を生ぜしめ、千万の軍と雖(イヘ)ども尚(ナ)ほ畏(オソ)れざるに至らしめんには、幼年のとき活発なる音楽を以て其(ソノ)心情を養ひ、以て漸次勇壮活発なる資性となからしむべし。例せば徴兵を嫌忌するものの如きは、道理上より義務上より之を勧告せんより寧(むし)ろ、勇壮活発の気象(ママ)を養成し、自ら奮つて兵役に就んとするの尤(もつと)も勝れるに如(し)かず。（句読点大本）

このように音楽教育によって勇猛果敢な気風を育て、積極的に兵役につかせることができると主張するのである。

また波多野は、

> 近頃、東京にて帝国大学出身の学士、学生及其他(およびその た)の学校教員等の有志者、事あり以て集会する時には、蛍の光り、思ひ出れば杯(ナド)を合唱して興を添へるを常とす。（句読点大本）

と当時の様子を伝える[同:57]。「思ひ出れば」は「蛍(蛍の光)」とともに『小学唱歌集・初編』収録の唱歌であり[文部省1884a:23]、ここからは、明治中期において音楽教育を受けた学生が社会に進出している状況がうかがえる。

尼ヶ崎は国民国家について、国への《帰属感〈一体感と言ってもいい〉を持つものが「国民」であり、国民の誇りの根拠、忠誠の対象が「国民国家」である》としているが[尼ヶ崎2011:69-70]、先に述べたように、江戸期における幕藩体制のもと、同胞意識など持ち得なかった人々を国民としてひとつにまとめることに音楽教育は貢献する。共通の歌を歌うことによって、国民としての一体化が促進されてゆくのだ。唱歌教育は軍歌の流行を生むことで実を結ぶのである。

尼ヶ崎はまた国民国家は《全員参加のゲーム》であるとも言う[同:26]《全員参加のゲーム》の最大の見せ場は国防である。それまでは武士という軍事の専門家が担っていた軍務に、国民国家では国民全員が参加する。《勇壮活発の気象を養成し、自ら奮つて兵役に就んとする》という波多野の狙いは軍歌の隆盛により、みごとに現実のものとなっていくのである。

おわりに

辻田は外山の「軍歌」を本邦初の軍歌とする一方[辻田2014:6]、尼ヶ崎は同じ外山の「抜刀隊」を《日本最初の軍歌》としている[尼ヶ崎2011:157]。本稿では軍歌というジャンルは河井版『軍歌』の発刊を起点とするととらえるが、うち１作品を選ぶのであるなら後者をとる。

まず、ルルーにより曲がつけられたことを受け、1885(明18)年７月15日の『東京横浜毎日新聞』に《曾て外山正一氏が、新体詩抄中にものせられし抜刀隊の詩は、今度我国の軍歌となすことに定め》という記事があるが、長谷川はこれが「軍歌」という言葉の初出であると指摘している［長谷川2009:18]。軍歌とジャンルが生まれる前夜とはいえ、軍歌という呼称をはじめて受けた作品であることは大きい。後に、「抜刀隊」は同じルルー作曲の「扶桑歌」合成され、「陸軍分列行進曲」という陸軍の制式行進曲に編曲され、現在でも陸上自衛隊で使われている[辻田2014:12-3]。

また、外山は、「抜刀隊」の解説に

> 西洋にては戦の時慷慨激烈なる歌を謡ひて士気を励ますことあり。即ち仏人の革命の時「マルセイエーズ(ラ・マルセイエーズ)」と云へる最と激烈なる歌を謡ひて進撃し、普仏戦争の時普人の「ウオツケメン、オン、ゼ、ライン(ラインの守り)」と云へる歌を謡ひて愛国心を励ませし如き、皆此類なり。左の抜刀隊の詩ハ即ち此例に倣ひたるものなり。[外山1882:28]（句読点大本）

と書いている。つまり、西洋における軍歌というものの役割とその意義を認識した上で「抜刀隊」は書かれたのである。外山自身、1895(明28)年の『新体詩歌集』において《本邦に於ける今の軍歌の嚆矢は。14年前に予の作りし「抜刀隊」の歌にして》と回想してもいる[外山1895:4]。

実は辻田も《外山こそ、軍歌という近代日本有数のジャンルを切り拓いた偉大な先駆者であった》のであり、《「国民の軍歌」の必要性に逸早く気づき、西洋列強の事例を研究しながら、直近の内戦をテーマにして「抜刀隊」を作りあげた》わけで、《このあと続々と誕生する3000曲もの明治軍歌も、実に外山の功績なしには考えられない》と外山の功績を大いに評価している[辻田2014:12]。

軍歌とは国民によって歌われるべきものである。同じ外山の「軍歌」より早い時期に国民に向かって国民のために作られた「抜刀隊」こそが本邦初の軍歌の名にふさわしい。すなわち、新体詩として創作された「抜刀隊」は、「抜刀隊の歌」として河井版『軍歌』に掲載されることではじめて軍歌となったのである。軍歌の登場を願い、自らその雛形を創作し、狙い通り本邦初の軍歌を生み出した外山こそが、軍歌の父の名にふさわしいのであ

る。

なお、軍歌は本稿で扱った時期以降に本格的に発展するが、それについてはまた稿を改めて論じたい。

注　各論４構成表

論文呼称	論文名	掲載号（発行年）
各論4-1	日本における「詩」の源流としての「唱歌」の成立―国民国家論7(※)― https://suzuka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1415&item_no=1&page_id=13&block_id=21	鈴鹿国際大学紀要・第16号（2010）
各論4-2	『新体詩抄』による「詩」の本流形成―国民国家論12― https://suzuka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1507&item_no=1&page_id=13&block_id=21	鈴鹿国際大学紀要・第21号（2015）
各論4-3	『新体詩歌』による「詩」の流域拡大―国民国家論13― https://suzuka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1888&item_no=1&page_id=13&block_id=21	鈴鹿大学紀要・第22号（2016）
各論4-4	『十二の石塚』による「長詩」の誕生―国民国家論14― https://suzuka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2483&item_no=1&page_id=13&block_id=21	鈴鹿大学紀要・第23号（2017）
各論4-5	美妙・山田武太郎『少年姿』あるいは「男色」―国民国家論15― https://suzuka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2710&item_no=1&page_id=13&block_id=61	鈴鹿大学紀要・第24号（2018）
各論4-6	【本稿】1886年における「軍歌」の誕生―国民国家論16―	本紀要

※論文の副題「明治期における「文学」（概念）の形成に関する国民国家論」は「国民国家論」と略記

参考文献

【紙媒体】

(1)書籍

・尼ヶ崎彬(2011)『近代詩の誕生-軍歌と恋歌』大修館書店

・臼田甚五郎(1976)『日本古典文学全集25－神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』小学館

・小島憲之他編(1975)『日本古典文学全集5－万葉集4』小学館

・観世左近編(1976)『頼政』檜書房

・山本康治(2012)『明治詩の成立と展開―学校教育との関わりから―』ひつじ書房

(2)新聞

・永田和宏(2018)「象徴のうた38－平成という時代」『大阪日日新聞』(9月28日)

【電子媒体】

(1)電子書籍

・辻田真佐憲(2014)『日本の軍歌―国民的音楽の歴史』幻冬舎

(2)インターネット（最終閲覧日:2018年11月10日）

(a)国立国会図書館デジタルコレクション

・宇都宮源平編(1886)『新体詩歌集』愛文舎
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/876369)

・奥田栄世(1889)編『軍歌集註釈』出版者不詳
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/855201)

・大庭景陽編(1886)『新撰軍歌抄』三谷平助
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/855446)

・河井源蔵編(1886)『軍歌』有則軒
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/855126)

・岸田吉之輔編(1886)『書生唱歌』酒井清造他
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/855402)

・小山作之助編(1891)『国民唱歌集・第1』共益商社
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/855240)

・高島文吉編(1889)『軍歌集』高島文吉
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/855193)

・外山正一他編(1882)『新体詩抄・初編』丸屋善七
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/876377)

・外山正一(1895)『新体詩歌集』大日本図書
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/876368)

・中島洋(2005)「海行かば」太平洋学会『太平洋学会誌』No.95
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10495515)

・中村安太郎編(1890)『生徒用唱歌』温故堂

(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/855510)
・波多江秀次編(1889)『音楽新論・唱歌原理』内田老鶴圃
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/854774)
・文部省音楽取調掛編(1884a)『小学唱歌集・初編』文部省
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/992051)
・文部省音楽取調掛編(1884b)『小学唱歌集・第２編』文部省
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/992052)
・文部省音楽取調掛編(1884c)『小学唱歌集・第３編』文部省
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/992053)
・山田美妙(1886)『新体詞選』香雲書屋
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/876381)
・吉村信二郎(1888)『唱歌』共進書屋
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/855307)
(b)人間文化研究機構・近代書誌・近代画像データベース
・竹内隆信編(1882a)『新体詩歌・第1 集』竹内隆信
(http://school.nijl.ac.jp/kindai/CKMR/CKMR-00001.html#1)
・竹内隆信編(1882b)『新体詩歌・第2 集』竹内隆信
(http://school.nijl.ac.jp/kindai/CKMR/CKMR-00002.html#1)
・竹内隆信編(1882c)『新体詩歌・第3 集』竹内隆信
(http://school.nijl.ac.jp/kindai/CKMR/CKMR-00003.html#1)
・竹内隆信編(1883a)『新体詩歌・第4 集』竹内隆信
(http://school.nijl.ac.jp/kindai/CKMR/CKMR-00004.html#1)
・竹内隆信編(1883b)『新体詩歌・第5 集』竹内隆信
(http://school.nijl.ac.jp/kindai/CKMR/CKMR-00005.html#1)
(c)国文学研究資料館
・並河勘介(1848)『義経百首軍歌』
(https://www2.dhii.jp/nijl_opendata/searchlist.php?md=idl&bib=200014284)
(d)その他
・上田博章(2016)「海行かば」HP『上田博章＠昭和8年COM』
(http://weddson.my.coocan.jp/umi.html)
・NHK「海ゆかば―NHK名作選みのがしなつかし」『NHKアーカイブス』
(https://wwgw2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D0009060041_00000)
・小松泰静(2017a)「「海ゆかば」の実像（上）大伴氏の家訓時代に翻弄」『中日新聞』(7月15日)

(http://www.chunichi.co.jp/hokuriku/article/bunka/list/201707/CK2017071502000223.html)
・小松泰静(2017b)「「海ゆかば」の実像（下）信時の業績 近年見直し」『中日新聞』(7月22日)
(http://www.chunichi.co.jp/hokuriku/article/bunka/list/201707/CK2017072202000214.html)
・田口親(1979)「トコトンヤレ節について」早稲田大学図書館『早稲田大学図書館紀要 』第20号
(https://core.ac.uk/download/pdf/144468016.pdf)
・鳥山啓「軍艦」「東京音楽隊ＨＰ」
(http://www.mod.go.jp/msdf/tokyoband/gallery/download/images/jpg/gunkan03.jpg)
・西野喜与作(1932)『半世紀財界側面誌』東洋経済出版部
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1443924)
・長谷川由美子他(2009)「明治時代出版「軍歌集」にみる軍歌の変遷について」「図書館情報メディア研究」編集委員会『図書館情報メディア研究』第７巻１号(筑波大学)
(https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=18572&item_no=1&page_id=13&block_id=83)
・林乃爾(だいじ)(1892)『手風琴独稽古・第1編』林乃爾
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/854960)
・三谷種吉(1891)『手風琴曲譜集・第2集』村上書房
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/854939)
・満下順子(2004)「日本における軍楽の受容とその作品にみる日本的特徴に関する研究一軍歌の形成過程を中心に一」学校音楽教育研究会『日本学校音楽教育研究会紀要:学校音楽教育研究』第8巻
(https://www.jstage.jst.go.jp/article/ssmep/8/0/8_KJ00005035454/_article/-char/ja/)
・宮岡薫(1993)「『続日本紀』「海行かば」歌謡の表現」立命館大学『論究日本文學』第59号
(http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/jl/ronkyuoa/AN0025722X-059_001.pdf)

国際人間科学部国際学科非常勤講師　　touch62930@hotmail.com

鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要
人文科学･社会科学編 第 2 号　2019

The Birth of “Gunka” in 1886
—A Study of “National Literature” in Japan as a “Nation State”(16)—

Tatsuya OMOTO

Abstract

In this paper, we will examine the creation of “gunka ”(military songs) in the Meiji era. *Shogaku Shoka Shu* (*Song books for the elementary school*, 3vols. 1882-4), *Shintaishi-sho* (*Selection of New-style Poems*, 1883) and *Shintai-shiika* (*New-style Songs and Poems,* 5vols. 1882-3) contain many military or patriotic lyrics, but they were not called “gunka” as there was no genre of “gunka in those days.　Genzo KAWAI integrated some components of these books to edit *Gunka* in1886.　The publication of the book led to the formation of new genre.